

人文学部の
今を伝える

Agora

人文ニュース<アゴラ>

"AGORA"とは、ギリシャ語で"広場"という意味です。

45巻2号
山形大学人文学部
2013.12.20

人文ニュース 第45巻2号 <http://www-h.yamagata-u.ac.jp/agora/index.htm>

Question 世界的にも有名な山形の冬の風物詩、蔵王山でみられる「これ」は いったいなんでしょう? 〈答えは12ページにあります。〉

[解説]

○1928(昭和3)年、山形高等学校(山形大学人文・理学部の前身)の安斎徹教授と山岳部学生が山小屋を建ててスキー合宿を行いました。このとき、蔵王山の針葉樹に吹き付けられる雪片が氷化するメカニズムを発見し「これ」を命名しました。

○1935(昭和10)年には塙本閻治氏が世界ではじめて英国で映画として発表し賞を獲得しました。その後1936(昭和11)年にアーノルド・フランク氏が撮影し広く紹介しました。

○終戦後、吉田茂首相側近の貿易庁長官・初代東北電力会長白洲次郎が自ら別荘「ヒュッテ・ヤレン」を1958(昭和33)年に建て、「東洋のサンモリツ(スイス)」構想を提唱しました。

山岳鉄道構想、のちの蔵王ロープウェイの建設へつながりました。

○1956(昭和31)年のコルティナダンペッツォ冬季オリンピックでアルペンスキーワールドカップのトニー・ザイラー氏が、松竹映画『銀嶺の王者』(1960(昭和35)年1月)の撮影で蔵王を1ヶ月訪れました。このことが、オーストリアのチロル州キツツビュエル市との山形市の姉妹都市50周年、日本の国際スキー交流へと発展しているのです。

出題:法経政策学科 田北俊昭准教授(都市地域経済学・地域ブランド)



山形大学人文学部
facebookページ
開設いたしました!
ぜひご覧ください。

人文学部1号館が生まれかわります!



昨年度の2号館に引き続き1号館の耐震・増築工事を行っております。

新1号館の1階部分には博物館が移設され、2階には教室と演習室、3階には大講義室が建設される予定です。

関係者のみなさまにはご迷惑をおかけしますがよろしくお願ひいたします。



日本史の国際性

学科長
インタビュー

松尾剛次

人間文化学科長・教授(日本中世・近世史)



—新学科長さん、自己紹介をお願いいたします。

人間文化の学科長の松尾剛次と申します。出身は長崎県で、山形大学33年生です。専門は日本中世・近世史(12世紀から17世紀あたりの日本の歴史)と日本宗教史です。

—長崎県からいらしたんですか?山形の暮らしはどうですか?

高校までは長崎ですが、大学時代は東京でした。正直いって、暑い方が好きなので、山形の冬の寒さ、とりわけ雪は嫌いです。でも、30年以上暮らして、だいぶ慣れました。

—歴史学がご専門のようですが、少し具体的に話してください。

いま59歳なのですが、20代から40代までは、鎌倉時代に生まれた鎌倉新仏教の研究に多くの時間を割いてきました。とりわけ、奈良市にある西大寺の叡尊(1201-1290)らの教団を中心とした、宗教全般の研究です。また、当時は京都・奈良・鎌倉の中世都市のありよう、都市民の暮らしなどにも光を当ててみました。ところが、40代の半ばからは、山形県域の歴史にも関心をもち、最上義光(1546-1614)・安達峰一郎といった山形の偉人の研究にも努めています。

—最上義光と安達峰一郎というのは一言でいえばどんな人ですか?

最上義光は、57万石の大大名で、初代山形藩主ですが、置賜地域を除く山形県域を支配し、山形の基礎を作った人物です。今年は義光没後400年目にあたり、山形市で義光に関するイベントが数多く開催されています。安達峰一郎は、山辺町出身で、初代常設国際司法裁判所の所長をアジア人として初めて勤め、世界平和に努めた偉人で、オランダで國葬になった人物です。毎年11月(今年は16日13時から)には、安達の精神を学んで欲しいので、安達峰一郎記念世界平和弁論大会を山形大学都市・地域学研究所が開催しています。来聴大歓迎です。最上義光も安達峰一郎も、過小に評価されてきた人物ですが、調べてみると、大変な偉人だったとわかつきました。学生のみなさんにも、ぜひ関心をもってもらいたいものです。

—先生は海外の大学で客員教授をされていたのですね。

アメリカのプリンストン大学の客員研究員を皮切りに、ロンドン大学とニューヨーク州立大学、北京外国语大学で客員教授をしました。恥ずかしいのですが、現地では、英語で講義をしたので、その準備で毎日英会話学校に通いました。高校生向けの模擬講義ではジブリ作品を有効に活用しています。映画館で会ったら声をかけてください。

ですが。日本学の方が海外に招待される機会は山のようにあることを、皆さんに知って欲しいですね。国際人とは、自国のことよく知っていることが前提なのです。

—海外の大学でどこが思い出ぶかいですか?

プリンストン大学、ロンドン大学、ニューヨーク州立大学、北京外国语大学いずれも良いところと悪いところがありますが、ロンドン大学ですかね。研究室が大英博物館から歩いて5分くらいのところだったので、気分転換に大英博物館にかよいました。ロゼッタ石など世界の宝が身近にあるのはとても刺激的でした。プリンストン大では、大江健三郎さんが同僚だったので、大江さんの警咳に接せられたのは思い出ぶかい経験です。大江さんは子供たちには大変親切で、日本人学校で講演をしてくださいました。その時に、講演の感想文を書いたら添削しますと述べられたのです。私の息子は、長い感想文を書いたので、大江さんに渡すと、添削だけの感想文が返ってきました。それは息子にとって宝になっています。

—山形大学人文学部人間文化学科の魅力はなんでしょうか?

人間文化学科は文学部で学ぶ、哲学、歴史学、文学といった伝統的な学問から文化人類学、心理学、社会学といった、どちらかといえば新しい学問まで幅広く学べる点がまず挙げられます。また、教員が48名で学生は1学年で100名ですので、きめこまかな指導を受けられることがあります。この点は大いに強調すべき利点でしょう。私学では、日本史学科だけで1学年で100名のこともありますからね。大学院では文化システム研究科で6名が定員なので、よりきめこまかな指導が受けられます。そうした利点を知って欲しいですね。さらに、最近では教員の博士号取得率も5割になっていますし、教員の教育方法改善の努力も熱心に行われています。

—最後に先生の趣味はなんですか?

趣味はボーリングです。マイボール・マイシーブズのボーリング大好き人間です。40代までは、毎週のようにボーリング場にかよっていました。でも最近は忙しくてボーリングができないで困っています。もう一つは映画を見ることです。最近も宮崎駿「風立ちぬ」を見ました。大好きな映画やアニメなどを講義に使えば学生の興味関心を高められるので、積極的に映画館にはかよおうとしています。高校生向けの模擬講義ではジブリ作品を有効に活用しています。映画館で会ったら声をかけてください。

—ありがとうございました。

最近の法経政策学科について

学科長
インタビュー

星野 修

法経政策学科長・教授(西洋政治思想史)



—最近の法経政策学科の先生たちについてお聞かせください。

2013年3月に定年で退職された先生がお二人、若手で他の大学に転出された先生が三名おられました。また、2014年3月にお二人の先生が定年で退職されます。

しかし、2013年4月には地域政策論の山本匡毅先生と公共政策学の川村一義先生が、11月には管理会計の尻無濱芳崇先生が着任されました。2014年1月には経営学の柴田聰先生、4月には法哲学の池田弘乃先生と環境経済学の杉野誠先生が着任します。どなたも30代の新進気鋭です。さらに、あと二名の若手教員を採用する予定です。法経政策学科のスタッフは、著しく若返ります。これまででは(現代日本社会の年齢構成を反映したような)年長の教授が多数派でしたが、これからは若手教員が多数派となります。彼らが学科に清新な風を送り込んでくれることを願っています。

—若い先生たちが増えることによって、具体的には、どんな変化が期待されるのですか?

教員と学生たちとの年齢差が縮むことになりますが、自分の教員歴を振り返っても、また現在の若い先生たちを見てても、「単に『若い』」というだけで「教育効果」があるように思います。むろん、ヴェテランの先生たちには長年の経験によって培われた教育技術があります。しかし、《若さ》には、それを補って余りあるものがある気がします。学生諸君との年齢的そして精神的な近接性によるものなのでしょうか、若い教員はおしなべて学生たちと親密な関係を築くのが上手です。ゼミ生を連れて、花見、芋煮会、紅葉狩り、またゼミ合宿を兼ねた旅行など(数え上げただけでも、ロートルの私などは疲れてしまうような)学外への活動を、苦も無くこなしています。法経政策学科の場合、3、4年生は、ゼミを中心とする学生生活を送るので、卒業後も忘れ難い思い出となるでしょう。演習中も、学生たちはあまり気おくれすることなく自由に発言しているようです。

—先生の学生時代はいかがでしたか。

先日、東京で、生前にたいへんお世話になった先生の「偲ぶ

会」があり、夫婦で参加してきました。その折に、後ろから急に肩をたたかれ、「久しぶり!」と声をかけられました。近代中国政治思想史がご専門で、現在、東大副総長のS先生でした。S先生は、私の学生時代及び院生時代の比較政治学の先生ですが、当時、東北大法学部の最年少助教授で、20代後半の年齢でした。政治学と比較政治学を、私に文字通りハラハラ教えてくれた恩人です。当時の私は生意気ばかりで、精一杯背伸びして、S先生と議論一のつもりの話を一していたのですが、そんな私に対していつも楽しそうに「兄貴風(?)」をふかしてつきあってくれる方でした。(学生時代に親しくしてくださっただけではなく、私の助手時代、そして山形大学に赴任してからの若い教員時代も、親身になってアドバイスをくださる方でした。しかも、今なおサービス精神旺盛で、初めて会った私の妻に、私が学生時代、いかに優秀であったかを長々としゃべって、リップ・サービスしていました。) 少し恥ずかしいのですが、あえて言えば、それは「青春」と「青春」が出会った師弟関係だったのであります。今なお感謝の念と懐かしさの感情を惹起する体験です。

自分の若手教員時代も、学生たちと延々と話をし、飲食を共にする機会が多かったと思います。

—若手教員多数派の新生(?) 学科となって、学生たちもいつそう勉学に励み、楽しい学生生活が送れるというわけですね。

そうなってくれることを心から願っています。



星野ゼミ(比較政治学演習)のみなさん

—地域に根ざし世界を目指す—

研究プロジェクト 1

「文字の来た道」を求めて

「日本史を専攻しているのに、どうして韓国に留学するのですか?」今から5年前、韓国に1年間留学することが決まったとき、いろいろな人から質問されました。私たちがふだん使っている漢字が、どのようにして日本列島の社会に浸透していくのかを研究していく私は、そのルーツとなる朝鮮半島の古代の漢字文化を研究することが不可欠であると考え、留学を決めたのです。

漢字文化といえば、漢字を発明した中国がすぐに思い浮かびます。しかし漢字は、中国から直接日本列島に入ってきたわけではありません。中国とは言語体系のまったく異なる朝鮮半島で、漢字を使いこなす技術が生まれ、その技術が日本列島に伝わり、応用されたことが、最近の研究でわかつきました。手かかりとなったのは、木簡とよばれる、木片に墨で文字を書いた資料です。日本では7世紀後半の飛鳥時代から木簡による文字の記録が行われるようになりますが、朝鮮半島ではそれよりも100年ほど早い6世紀半



韓国慶北大学での国際シンポジウム



韓国の古代石碑調査

人間文化学科
三上喜孝 准教授(日本史)

ば頃から、木簡による記録が本格的に行われます。韓国の歴史学界が木簡に注目するようになったのはここ10年ほどのことで、ちょうどその研究の高まりの時期に、韓国で1年間勉強したことは、私にとってとても刺激的な体験になりました。

研究の過程で多くの仲間を得ましたが、ときに、日本と韓国の研究者が「歴史」について語りあうことの難しさも目の当たりにしました。それまで日本の中しか研究してこなかった私には貴重な体験でした。今でもそのとまどいは続いています。

しかしながら、韓国に所在する古代の石碑や、発掘調査で出土した木簡の一文字一文字を、じっくりと観察していくと、同時代の日本列島で書かれた文字との共通点が浮かび上がります。その背後には、私たちが想像する以上の、人びとの交流があつたに違ひありません。古代における漢字文化の広がりは、東アジア世界における外交や戦争、それともなう人びとの移動といった、歴史の変動と大きくかかわっているのです。

漢字文化の広がりの歴史を研究することが、東アジアとよばれる世界の歴史を読み解くための、大きな鍵になるのではないか、と私は信じています。かつて東アジア世界の人びとが「文字」を介して交流したように、私もまた「文字の研究」を介して多くの研究者と交流しているのですから、「文字」とはまことに因縁いたものです。

研究教育活動の紹介

人間文化学科 山田浩久 教授
(都市地理学)



——先生の研究でいらっしゃる地理学とはどんな学問でしょうか?

山田: 私の研究している都市地理学とは、都市が大きくなるにつれて出てくる様々な問題をどうやって解決するかを研究する学問です。私の仕事は、統計資料には現れにくい地域の特徴を実際に現地に行ってみることで理解し、問題解決のお手伝いをすることです。

——具体的にはどんなことをやっていらっしゃるのでしょうか?

山田: 最近では、温泉街にどうやって観光客をひきつけるかを考えて、観光客に楽しんでもらえるような街歩きコースを提案しています。また、橋や道路の位置をチェックして、交通渋滞の原因を指摘したり、災害のときに使用できるルートを見つけて、県や市に報告するといったことも仕事の一つですね。過去には、離島に住む人々の生活や行動を調べて、お年寄りが多くなった離島の今後について政策的な提言をしました。

——大変ですね。

山田: いえ、けっして大変なわけではなく、むしろ楽しいです。その街の良い所を見つけるためには、その土地に溶け込み、人と話し、一緒にご飯を食べ、楽しむことが必要なんです。その土地を楽しむことが、地理学のフィールドワークの第一歩ですから。

法経政策学科 國方敬司 教授
(西洋経済史・環境経営学)



——イギリス経済史のなかでどんなことを研究しているのですか?

國方: 中世農村社会ではなぜ領主が何百年も農民を支配し続けられたかについて研究しました。それは支配される農民側にもメリットがあったからなんですよ。

領主は農民同士でトラブルがあったときに裁判をする公的な役割も果たしていました。昔のイギリスの農業は共同で行っていたのです。そのためトラブルが起きやすく、誰かに裁判してもらう必要があったのです。平等な関係にある農民だけでは、解決ができないでしょう? そのために領主という権力が必要だったのです。

——それは今までとは違う見方ですね。

國方: 領主は秩序を維持するために必要な存在だったのです。つまり農民と領主は暴力的な関係ではなく、お互いにお互いを必要とする関係だったのです。そしてルールを守らない領主を農民たちが領主の裁判所で訴えるケースもあったのですよ。

——なぜ専門としてイギリス中世の経済史を選んだのですか?

國方: 経済史を勉強始めた頃から、近・現代を研究することが流行っていました。しかし私は今では失われてしまった価値観や世界をもう一度自分の手で復元してみたかったので、中世という時代を研究しようと思ったのです。

研究プロジェクト 2

地域政策形成と地域活性化

地域政策論は、今年度より人文学部法経政策学科に新設されました。地域政策論とは地域に存在する課題のメカニズムを解明し、その処方箋を描く学問です。「学問」とはいっても、「論」という名前が示すように確立された学問体系があるわけではなく、経済学、行政学、政治学、地理学などを横断的に学びながら研究する学際領域の科目になります。

地域政策は、かつて全国総合開発計画(全総)と呼ばれる国の政策枠組があり、自治体は国の方で政策調整をすれば済みました。ところが、全総の廃止や地方分権化の進展により、市民や自治体が自分たちの生活する地域を暮らしやすくするために、地域政策づくりを行う必要性に迫られるようになっています。地域政策論の講義内容は、学生が将来、市民や自治体職員として地域政策づくりをする際のポイントを示しています。

地域政策論では今年度よりゼミナール(地域政策論演習)を開講しています。ゼミ生は3名と少数ですが、少しづつ活動を進めています。5月には山形市中心市街地のまち歩き、7月にはフランワーグ長井線沿線(南陽、長井)へのまち歩き、8月には神戸への震災まちづくりの調査、10月には高畠町の中心商店街調査を行いました。ゼミ生は山形県内出身者がおらず、東日本大震災被災地出身であるため、山形を知ることと、震災後の復興まちづくりを中心に研究を進



長井市中心商店街でのヒアリング



神戸市長田地区(震災被災地域)のまち歩き

法経政策学科 山本匡毅 准教授(地域政策論)

めたところです。また地域政策論演習の特徴として、学生の主体性に重きを置き、アボ取りから調査の取りまとめ、プラン作成までを行なっています。

地域政策論演習は2013年度後期から、本格的な地域づくりのプラン作成に取り組みます。テーマは「観光による山形市中心市街地活性化」です。この調査・研究では、来年度、山形県が山形ディスティネーションキャンペーンを行うことを踏まえ、山形市中心市街地を観光でいかに活性化するかを提案します。難しい課題ですが、来年の3月にはきっと学生が実りのある成果を出していると思います。

地域政策論は、自分が暮らす地域を良くしていくことが目的です。いずれ市民になる学生の皆さん、あるいは市民の皆さんには必ず関連してきます。これを機会に山形を、東北を元気にする地域政策論を一緒に研究してみませんか。

人間文化学科 清塚邦彦 教授
(言語哲学)



——言語哲学とはどんなことを研究しているのでしょうか?

清塚: 言語は思考を表現するための道具ですが、逆に、高度な思考は言語の助けがなければ成り立ちません。二十世紀を代表する哲学者ヴィトゲンシュタインは、思考の限界を明らかにするには言語の限界を明らかにする他はない、という趣旨のことを『論理哲学論考』で書いています。大まかに言えば、言語を考えることで人間の知的能力の本性や限界を明らかにしようとしたのが現代の言語哲学です。

——楽しさや悲しさの感情は言葉では表せない気もしますが?

清塚: たしかに感情は言葉ではありません。ただ、感情の理由やその複雑な内容は言葉がないとはいきません。いろんな動物が感情を持っているますが、言語によって感情を繊細に「分類化」できるのは人間だけです。

——先生はどうして言語哲学の道に進んだのでしょうか?

清塚: 哲学という古典文献を熟読するスタイルの研究が主流になりがちですが、言語哲学の議論はそんな枠組みからは自由などろに惹かれました。もっとも、最近はむしろ言語以外の記号系に関心があります。今後は絵画やフィクションについての哲学的分析を深めてみたいと思っています。

法経政策学科 小笠原奈菜准教授
(民法)



——民法のなかで具体的にどんなことを研究しているのですか?

小笠原: 私が現在一番興味を持って研究しているのは、「情報提供義務」です。

——情報提供義務というのはどういうものなのでしょうか?

小笠原: ある人がある人と契約をしようとする場合、例えばマンションを購入するときに、いきなり契約書にサインをして支払いをすることはないですよね。モデルルームを見て、分譲業者の説明を聞いて、資金が準備できるかなど検討をして、購入することを決断し、契約を結ぶことになります。この場合の分譲業者の説明にあたる部分、つまり、契約を結ぶかどうかを決める際に必要な情報を適切に提供しなくてはいけませんよ、ということが情報提供義務になります。分譲業者が間違ったままの情報を与え、購入者がちょっとした勘違いをしたまま契約を締結してしまったときに、業者にどのような責任があるのかについて研究しています。

——なぜ民法を研究しようと思ったのですか?

小笠原: 3年からのゼミを選択するにあたって、民法が一番身近で、生活に密着していて楽しそうだな、と思い選びました。軽い理由で選択をした民法ですが、勉強をしていくうちにどんどん面白くなりましたね。

留学生の活動レポート

楽しくて充実した2日間

大学院 社会文化システム研究科 2年
王 継紅さん

7月13日と14日の2日間、人文学部が外国人留学生を対象に行なった岩手県の旅行ツアーパーに参加しました。

13日の朝7時半に大学に集合し、皆は朝一番の明るい笑顔でバスに乗りました。窓外の街道を見ながらガイドの方の説明を聞くうちに、心が普段の多忙から次第に落ちていくのを感じました。

2時間程度岩手ヤクルト工場に到着。案内の職員さんから乳酸菌発見の過程とヤクルト発展の歴史について説明を聞き、その後通路から工場生産ラインを見学しました。成形室から充填室と包装室を経て、普段私達が購入する商品が出来上がりります。岩手ヤクルト工場では、1日170万本、6種類のヤクルトを作っているそうです。帰りには、乳酸菌飲料と、環境保護のために回収された空容器を再利用して作った定規をもらいました。健康のためにこれから毎日ヤクルトを飲もうかな。(笑)

午後は岩手県岩泉町にある龍泉洞を観光しました。龍泉洞は、秋芳洞と龍河洞と共に「日本三大鍾乳洞」と言われています。龍泉洞には、水深98mの第3地底湖や120m以上ある第4地底湖等全部で7つの地底湖があり、洞の長さは3.5km、温度はどこでも10度位で、夏服の私たちには確実な挑戦だと言えます。しかし、地底湖の底まではっきり見える青い水を見たら、その寒さを忘れるほどでした。



ヤクルト工場見学



被災地見学(たろう観光ホテル)



遠野で昔話



草木染め体験

日本漢字音と呉方言の対照

大学院社会文化システム研究科 1年
楊 佳辰さん

私は楊佳辰と申します。中国の江蘇省蘇州市の出身です。日本に興味を持って、5年前に留学生としてやってきました。最初は山形大学の地域教育文化学部・異文化交流コースに入って、日本や欧米の文化について勉強しました。その後日本語と中国語との発音の対照に興味を持ち、山形大学大学院の社会文化システム研究科に進学しました。せっかく日本に来たということもあるので、もっと勉強しようと思ったわけです。

日本語と対照される中国語は北京語を中心であり、中国の方言を含めた対照はまだまだなされていないのが実情です。中国における日本語学習者には、中国語の標準語である北京語を母語とする人たちの他に、中国語諸方言を母語とする人たちが多く存在するので、日本語音声教育においてはそれぞれの方言話者に対応した適切な方法が必要です。また、日本語における漢字とその読み方は中国人学習者にとっては難しいものですが、これらの漢字音の対照、特に中国語諸方言音との対照は、もっと深く進めていく必要があります。

ちなみに、江戸時代の日本では「唐話辞書」と呼ばれる中国語学習書が多数編纂されました。この「唐話辞書」に載せられる発音は中国近世音を反映しており、当時の中国の浙江地方で使われた杭

州語(呉方言の一つ)に基づいています。したがって「唐話辞書」は日本で作られた呉方言の資料と言えます。

私は江蘇省蘇州市の生まれであり、呉方言話者に属します。この呉方言は古代中国の発音を多く保存しています。実は現代の日本漢字音も、古代中国の発音を多く保存しています。しかしながら、先にも述べましたように、中国の諸方言音と日本漢字音との比較は、まだまだなされていないのが実情です。私は中国の方言音を記述することを通して、日本漢字音との近似性について考察していくと思っています。私自身日本に留学して5年になりますが、日本漢字音には苦労し、大変な時を過ごしました。この経験を踏まえて、中国の方言と日本漢字音との近似性や関係について研究していきたいです。また、日本語と中国の方言との対照を通して、中国人にとっての日本漢字音の効果的な発音方法を発見したいです。そして、中国人向けの日本漢字音の学習、日本人向けの中国語諸方言の学習などの言語教育へも応用したいと思っています。



特集 ナスカ力だより

最新のニュースをお届けします。お楽しみに!

人間文化学科
渡邊 洋一 教授

セビッヂエ、パラカス、やっぱり飛行機

ですが。ちなみにペルー料理は日本人の味覚にあうものが多く、ナスカ市内で売っている飾り気のないふつうのパンがとても美味しいかったです。

想定外だったのは、現地でパラカスとよばれる砂嵐でした。セスナの遊覧飛行が延期になったり、飛んだとしても大変に波乱に富んだものとなつたようです。市内でも、窓をしめても細かい粉のような砂が部屋中に入り込んでくるので大変です。

とどめは帰りの飛行機でした。深夜リマ発の30分の遅れはかわいいもので、アトランタで搭乗してから故障発見「回復はいつになるかわからない」との機長アナウンス。結局3時間あまり遅れて、つまりは山形行き新幹線最終に間に合わないのでした。



ペルーの代表的料理セビッヂエ



パラカスとよばれる砂嵐

本物を現地で体験すること:ナスカ実習より

人文学部人間文化学科 3年
桑原 優さん

私たちの参加したナスカでの文化人類学実習は、移動を含めて約2週間の日程で行われました。実習では、実際に現地で行われている調査に参加させていただきました。ペルーというほぼ地球の裏側の国での生活は、2週間という短期間でありますながら多くの驚きに満ちたものでした。

私たちは調査中に多くの遺跡や山、台地などを歩き回ることが出来ました。テレビやインターネット、本などでしか見たことがない地上絵や遺跡、ミイラなどを間近で観察し調査を行いました。実際に地上絵の描かれている台地に立った時に感じた第一印象は「広い!」でした。そして、なぜこのように果てしなく感じる砂漠台地に地上絵を描くために人が訪れたのだろうかと不思議に思いました。現地での実際の観察により印象に残っていることは、地上絵を侵食する水の跡や道路、遺跡に残る多くの盗掘の跡です。特に盗掘跡の周りには放置された人骨のかけらが散らばっており、最初に見たときは大変驚きました。日本でも盗掘された遺跡はありますが、本物の盗掘跡や放置された遺物を間近で最初に見たときにはショックを受けました。

現地での生活でもたくさん発見がありました。交通ルールに関しては外に出るたびに驚かされました。歩行者より車が優先だったり、クラクションが常にどこかで鳴っていたり、車線変更でウインカー



山形大学人文学部附属ナスカ研究所にて

地域とともに

今年度の公開講座

◆前期公開講座(人間文化学科)

19世紀西洋思想文化の宝石箱 —ニーチェからコナン・ドイル、フェノロサまで



人間文化学科
RYAN,Steve教授
新宮 学教授
平成25年度前期の公開講座は、「19世紀西洋思想文化の宝石箱」と題して、6月6日から20日までの期間に5回の講座として開催されました。

今回の講座で取り上げられたのは、アルフレッド・テニスン、フリードリヒ・ニーチェ、コナン・ドイル、ダニエル・テア、フランツ・シーボルト、ウィリアム・ピゲロー、アーネスト・フェノロサと、西洋近代の思想文化を代表する人物たち。その活躍した領域は、詩、哲学的思考、探偵小説、有機農法、博物学、オリエンタリズムと多岐にわたります。19世紀を生きた彼らの人となりとその思想について、人間文化学科の多彩な教授スタッフがじつに魅力的な語りで解説しました。

受講生もまた多種多様で、退職された教員や会社員、現役の地方公務員や本学職員、それに人文学部はもちろん放送大学の学生さんも多数聴講してくれました。

受講された皆さんには、近代の西洋思想のさまざまな宝物がたくさん入った宝石箱の中から、それぞれに相応しい宝物を見つけることができたのではないかと思います。

なお今回の魅力的な公開講座の企画は、〈あなたの街の放送局〉として知られるラジオモンスターの「まじゅリスト」のコーナーでも、取り上げていただきました。



【受講生の感想】

大場 登さん

今回は5回全講座出席で修了証書をいただき感激しました。これで3年連続の修了証書となり、自分を褒めてやりたい心境です。貴大学が毎年魅力的な講座を開いておられることに敬意を表します。

それぞれの先生方の各テーマへの切り口が違い、個性的面白さを感じました。また、自分がいかに無知であるかを知られ、たとえ知っていてもアバウトにしか知らないことを思い知られました。公開講座出席の意味は、それが白日の下にさらされ、それを正すために何かをしなければならないと自覚することだと思います。学生時代、英語英米文学を専攻ましたが、教師として長年語学的アプローチを専らにしてきました。が、この年齢に達してみると、やはり文学的、あるいは比較文学的アプローチがいかに大切かを最近とみに感じます。その意味でも今回の講座は有意義でした。

各先生がご用意されたパワーポイントやプリントの補助資料は大変役立ちました。忘却曲線が限りなく零に近づいて、整備された資料のありがたさが身に沁みます。今後とも充実した資料の提示をぜひお願いたいと思います。

◆後期公開講座(法経政策学科)

東日本大震災からの復興

法経政策学科 和泉田保一准教授

本年度後期の公開講座「東日本大震災からの復興」は、発災から2年半が過ぎた現在において、震災で破壊された地域と社会環境を持続可能なものとして再構築していくために私達には一体何ができるのか、という問い合わせからスタートしました。その考察のための一助として、5つの専門的な立場(公共政策学、民法学、都市法、行政法、経済思想)から、震災の引き起こした政治・社会的な影響を確認し、今後、大規模な災害が起こることによって生じうる事態に対応するための、また、被害から復興するために必要な、新たな社会システムや法制度のあり方について探し、そのような観点からの地域の創成について方向性を模索しようと考えました。

実は、講座の当初においては、震災の影響の大きさと同様に、あまりにもテーマとして大きすぎ、我々教員自身も、必ずしも問題の全容を把握し切っていたとはいえないかったでしょう。

そうした中で、講座の進行につれて、既存の諸制度の問題点が少しずつ浮かびあがり、それを見直していく上での「人間の復興」の観点的重要性が明らかになってきたのではないかと自負します。

こうした成果は、やはり、毎晩、方々から(仙台から参加された方もおられました)駆けつけ、熱心にメモを取り質問する受講生の皆さまの熱意に後押しされた部分が大きいです(その熱意については、下記の「受講生の感想」もご参照ください)。

なお、ある受講生からは、駐車場整理や受付の学生について、「明るく、若者らしいところに好感が持てました」との好評をいただきました。そして、実は、事務室のスタッフも総出でそれらを含めた運営全般において講座を支えていました。

この場を借りまして、講座の成功につきまして、まずは受講生の皆さんに、そして事務室スタッフ、運営補助の学生さん達にお礼を申し上げます。



【受講生の感想】

*今まで私は、福島で、原発事故による被害や広域避難について聞くことが多かつたが、決定プロセスの充実化という内容については、福島が抱える問題解決にもつながるのではないかと思ったので、ぜひ関連づけて学びたい。

*現行法の民法制度からの原発損害請求を説明してもらったことで、興味深く、わかりやすく民法から見ることができた。

*国民ひとりひとりが「防災」について考えるべきであることが理解できた。ここから発展して、自分の問題として「防災」を考えていくという雰囲気どう醸成するかということについて学んでゆきたい。

*「人間の復興」というタイトルに興味をひかれた。インフラなどの復旧が進みがちで、それを使う人間の復興がその後になってしまいういう現状、どうあってはならないということを改めて思った。

*前回講座の一部を次回講座で深掘りする構成により、全体で理解が深まった。巧みで丁寧なつくりだと思った。仙台からの参加であるが、山形大がこのテーマを公開講座で選び、被災地に思いを寄せていることに感銘した。

ホームカミングデー2013

平成25年10月19日(土)「ホームカミングデー2013」が開催されました。当日は多くの卒業生が母校である本学を訪れ、恩師や旧友に再会したほか、在学生とも交流を行いました。ここでは、「パネルディスカッション」と2つの「ゼミ懇談会」の様子を紹介します。

おへそりなさい 人文学部へ パネルディスカッション「みんなで語ろう:人文学部の昔と今」

人文学部の卒業生を代表する5名のパネリストを壇上にお迎えし、人文学部入学の経緯、学生生活の様子、その後の経験などを披露して頂きました。会場にお越しいただいたお客様からの質問にも答える形式で、40余年に及ぶ山形大学人文学部談義を楽しみました。

パネリストの皆さまの立ち居並ぶ姿に社会の第一線で活躍する力強さを見、発する言葉に人文学部そして山形大学へ寄せる深い愛情と叱咤激励を感じ、自然と話に吸い込まれてゆく1時間でした。



パネリストを務めてくださいました5名の人文学部OBの皆さま:

伊藤憲昭さん(1971年人文1回卒、株式会社シェルター)

佐藤正寿さん(1997年人文27回卒、山形県教育庁)

矢萩祐輔さん(2002年人文32回卒、ミレア・モンティアル株式会社)

叶 泰治さん(2002年社会文化システム研究科修了、英知学館株式会社)

原 拓也さん(2007年人文37回卒、2009年社会文化システム研究科修了、

山形大学小白川キャンパス事務部)



司会:
鈴木亨教授
専門は英語語彙意味論

人間文化学科「英語学系」懇談会

人間文化学科「英語学系」の懇談会では、県内ののみならず、宮城、秋田、岩手、東京などから、世代も卒業したての20代から40代まで20人を超える同窓生が集まり、現役学生と教員を合わせて30人以上が集まる盛況ぶりでした。

現役の英語教師の方が多かったので、教員志望の学生とグループをつくり、教員になるために学生時代に準備しておくべきことなどについて活発な意見交換が行われました。大学教員としてうれしかったのは、英語学の授業で触れた文法の説明が、意外と(1)教室での英語教育に役立つという現役教員からの声でした。学生のときにはいったい何のためにこんなことを(複雑で抽象的で意味不明で...)と思っていたことが、英語という言語をシステムとして考え、ことばはたたずあるがままに混沌と存在しているのではない、ということを生徒に伝える上で、ヒントになっていることです。

大学生へのちょっと面白いアドバイスとしては、学生時代に同世代の友人だけではなく、年上の大人とつきあう経験が大切であるということ。新人教員にとって、自分よりずっと年上の生徒の保護者との対応はなかなか苦労があるとのことでした。また、新指導要領による英語による英語の授業については、現場での試行錯誤を含む意欲的な取り組みの報告に、学生のみならず大学の英語教師としても身の引き締まる思いをしました。

一方、広く民間企業等に勤める先輩たちと学生で集まつたグループでは、多種多様な職場でそれぞれにがんばっている「大人たち」に、学生は憧れの目を向けるとともに、やはり良い刺激を与えられたようでした。

どのような職場であれ(転職を重ねた人も少なくないようです)、久しぶりに会うかつての教え子の皆さんの中は、まだ若々しくも、学生時代よりずっとたくましさを感じさせる素晴らしい笑顔であったことを最後に記しておきます。



法経政策学科「西洋法制史ゼミ」懇談会

懇談会には10名近くの先輩が仙台や、遠くはわざわざ東京から集まつてくださいました。ひとりは偶然にも?山形出張が入ったとか。当初、私は懇談会進行役を任せられ、嫌な沈黙が続いてしまわないかと困惑していました。しかしいざ始まつてみると、それは杞憂でした。初めてお会いする先輩もいましたが、「山形大学人文学部澤田ゼミ」という共通点はとても心強く、和気あいあいとした雰囲気の懇談会となりました。

懇談会は、最初に参加者の自己紹介から入り、その後澤田先生の特別講義、最後に在校生卒業生でのディベートという流れでした。澤田先生の特別講義では、かつてのゼミ生が「澤田先生の言って



報告者:
大場文恵さん
西洋法制史ゼミ所属。
中世都市ロンドンと
コミュニティについて研究中。

いることはこの3つにまとめられる!とした文言・澤田ドクトリンなどが登場。私も普段授業を受けてしつこくくる内容で、と同時に、とても大切な文言だと改めて感じました。これらの文言は、研究室の壁に飾ってあります。

最後のディベートのテーマは、「山形大学人文学部が無くなったらどうする?」。かなり衝撃的なテーマで先輩方もびっくりしていたようです。特定のゼミには所属しないという他大学のゼミを比較したり、大学で学んだことが社会人としても生きている現場のお話を聞いたりすることで、今の学生生活について非常に考えさせられました。それと同時に、今、卒業生が、様々な場所で活躍しながら、各々の課題と向き合っていることも感じました。

もっと話が聞きたいというところで時間となってしまい、とても残念でした。私としては、かつて澤田先生がゼミ生に飛び蹴りをした?という信じられない話など、もっと詳しく聞きたかったのですが、90分の懇談会はあつという間でした。

人文ニュース

今期、人文学部で行われた講話やイベントなど、
主要なニュースをお届けします。

学術講演会を開催しました！

11月19日(火)に学術講演会を開催しました(主催:人文学部、共催:山形大学法学会)。

テーマは「国家による暴力—現代世界の人権侵害をめぐって」

講師は元山形大学人文学部助教授で現在は東京大学大学院法学政治学研究科の大串和雄教授です。

約90分間の講演では「人権侵害の犠牲者」、「システムとしての権利侵害」、「人権侵害の正当化とその問題点」等について解説され、約300名の大教室は聴講する学生や教職員でほぼ満席になりました。



会場の基盤教育222教室(定員306名)はほぼ満席!



講演する大串教授
講演会後に学生さんの質問に答える
大串教授

オープンキャンパスで学部説明会等を開催しました！

山形大学小白川キャンパスでは8月3日(土)にオープンキャンパスを開催しました。人文学部では、人間文化学科・法経政策学科の「学科説明会」に加え、6名の教員陣による様々な



先生とのつどい



在学生とのつどい



人文学部イメージビデオの上映

◆模擬講義 講義名◆

[人間文化学科]

ジブリ作品と日本宗教史トロ・キ・サン・アシタカ
日本語教師ノスメー——日本語を武器に世界で働く——

教授 松尾 剛次
准教授 中澤 信幸
准教授 石澤 靖典

[法経政策学科]

高校生の契約生活!?
日本のこれからのために昔のことを考える:日本の外交と戦争
注目の経営学。あなたが日本のスティーブ・ジョブズになるかも!

教授 伏見 和史
教授 松本 邦彦
准教授 殷 勇

書籍・出版物紹介

映像の中の冷戦後世界

ロシア・ドイツ・東欧研究と

フィルム・アーカイブ

高橋 和・中村唯史・山崎 彰 編
山形大学出版会
2013年10月



冷戦後の世界を記録した多くの映画が山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映され、山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーに収録されてきました。

本書は、山形大学人文学部を中心とする研究者(高橋和、中村唯史、山崎彰の各教授)と学生が、膨大な数に上る映画の中から、特にロシア、ドイツ、東欧諸国に関する作品を調査した結果をまとめたものです。(定価本体2,000円+税)

東北発 災害復興学入門

巨大災害と向き合う、あなたへ

清水修二・松岡尚敏・下平裕之 編著
山形大学出版会
2013年9月



山形大学出版会から災害復興学テキスト『東北発 災害復興学入門』が刊行されました。(定価本体800円+税)

本書は、南東北三國立大学(宮城教育大学・福島大学・山形大学)が東日本大震災後の復旧・復興を支援し、新しい東北を創り上げていくために、人的交流と教育の連携を深めてきた成果として発刊されたものです。

人文学部からは、「序論 人間の復興」を下平裕之教授、「第1章 災害に強いコミュニティづくり」を北川忠明教授(学部長)が執筆しています。

表紙のQuestionの答え:樹氷 先人の願いの「樹氷」をシンボルに、今度は蔵王東北でオリンピックが開かれる日が来て、「東洋のサンモリッツ」が実現されればいいですね。

人文ニュース 第45巻2号

○発行／山形大学人文学部 ○編集／人文学部広報委員会 阿部未央 元木幸一 ○発行日／平成25年12月20日
〒990-8560 山形市小白川町1-4-12 電話023-628-4203 (人文学部事務室)
<http://www-h.yamagata-u.ac.jp/agora/index.htm> E-mail : jisoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

※本学部の最新情報については、ホームページをご覧ください。山形大学人文学部 <http://www-h.yamagata-u.ac.jp>

リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。